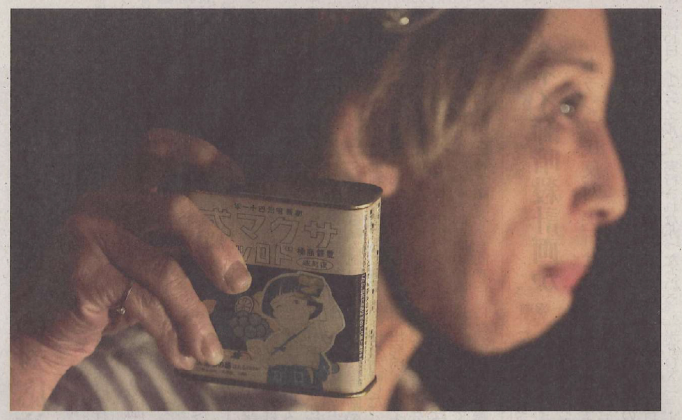
「火垂るの墓」聞いて感じて

戦後80年



三宮の駅構内で亡くなった清太の腹巻きの中には、節子の遺骨が納められたドロップの缶があった。見つけた駅員が「なんやこれ」と缶を振り、放り投げると「カラカラ」と効果音が鳴る。小道具にこだわり、細やかな演出がなされている

劇を行うホールの見取り図を手に本番での立ち位置を確認する新海さん(左から2人目)ら「陽なたの会」のメンバー

米軍の B29 爆撃機による空襲で町が炎に包まれる中、「清太（左）」と妹の節子が逃げ惑う場面。清太役の西山和子さん(62)は「親から託された大切な命を必死で守る姿や、親戚から逃れて安全な場所を探す様子など、戦時中の子どもが体験したことを伝えたい」と話す

空襲警報のサイレンが鳴り響く中、学生帽姿の兄が防空頭巾をかぶった幼い妹の手を取り、降り注ぐ焼夷弾の中を逃げ惑う。

「とにかくお母ちゃんのいる墓へ行かんと」

「兄ちゃん」野坂昭如氏「1930～2015年」の小説「火垂るの墓」の場面だ。舞台になった兵庫県西宮市で活動するボランティア団体「陽なたの会」が朗読劇に取り組んでいる。49～79歳の女性16人は28日の公演に向けて稽古に余念がない。

小説は、1945年6月5日に神戸で大空襲に遭い、西宮の親類宅に身を寄せた野坂氏の戦争体験を基にしている。空襲で孤児になった清太と節子のきょうだいが懸命に生きようとするも命を落とす様子が描かれる。

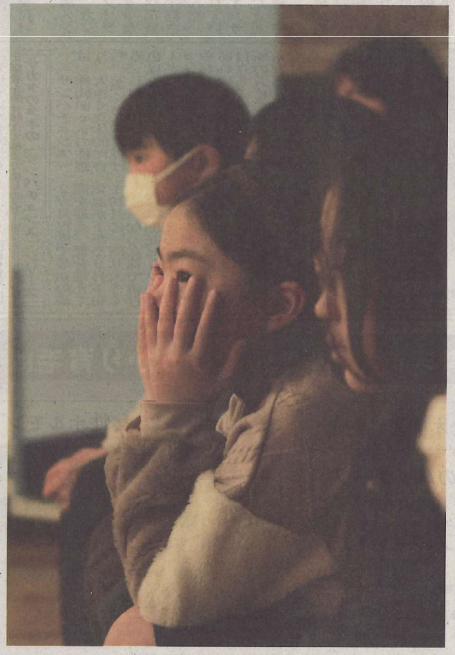
朗読劇の初舞台は2019年。当時、西宮市民有志が戦争の記憶の風化を防ぐ目的で「小説誕生の地」であることを伝える石碑の設置計画を進めており、同市の主婦竹田真由美さん(63)らが計画を後押ししようと考えたのがきっかけだ。高校時代に朗読劇の経験があった竹田さんがボランティア仲間で市内在住の俳優・新海百合子さん(74)に脚本と演出を依頼。石碑を建てた後も地元公民館などで20回に及ぶ公演を続けてきた。

公演時間は30分。舞台で朗読者が突っ立つわけではなく、空襲の場面では台本を小道具にして頭を覆い、亡くなった節子の魂を清太が見送る場面では木タルの光に見立てたLEDの光を揺らすなど、観客を劇に引き込む工夫が凝らされている。

竹田さんは「劇を通して平和の〝種〟を届けたい」という。今年2月には、西宮市立大社小学校5年生計100人の前で劇を披露した。80年前の〝人子どもたち〟の姿を食い入るように見つめた児童から後日、「家族や友達を大切にしご飯を食べていることに感謝したい」「戦争をしている国を止めたい」などの声が会に寄せられた。子どもたちに平和への強い思いが芽吹くことを信じ、公演は続く。

写真と文　吉野拓也

音響装置を使い、空襲警報やセミの鳴き声など、役者の動きを見ながら場面に合わせた効果音を出す



2月の公演は、地元の小学5年生の平和学習として行われた。児童らは真剣なまなざしで、80年前に自分たちの住む町で起きたことを学んだ

戦争の記憶を次世代に伝えるため5年前に建てられた「小説火垂るの墓　誕生の地」の記念碑

ズームアップ

毎週月曜日掲載

(2月3日から5月25日に兵庫県西宮市で撮影)

デジタルストーリーはこちらから

＊レイアウト　山本皓平

読売新聞オンラインのズームアップは
https://www.yomiuri.co.jp/photograph/zoomup/